学力づくりの最前線！

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

学力研の広場

ホームページアドレス http://gakuryoku.info/

NO. ３４８

2024. 3. 8

学 力 研 発行

常任委員長 岸 本 ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

ベネッセ教育総合研究所が「子どもの読書行動の実態」という調査データを公開していました。それによると、**小１から高３までの子どもの約半数が、一日の読書時間が「０分」であり、学年が上がるにつれてその割合が増えていく**のだそうです。では大人の読書についてはどうかと調べてみると、文化庁が行った調査では、**大人の約半数が本を全く読まない**という結果が出ていました。ちなみに別の調査によると、**教員の一日の平均読書時間は、一般労働者よりも短い**そうです。

「書物を読むということは、他人が辛苦してなしとげたことを、
容易に自分に取りれて自己改善する最良の方法である」

古代ギリシアの哲学者、ソクラテスが遺した言葉だそうです。読書は時間と空間を超えて、著者との対話を可能にする営みです。子どもたちを教え導く立場の教員である私たちこそ、読書から自己改善の手掛かりを見つけていく必要があるのではないでしょうか。…とはいえ、書店や図書館へ行けば数限りない本が並んでいます。その中からどんな本を手に取ればいいか悩むところ。常任委員のみなさんに、春休みにお薦めの本を紹介していただきました。（堀井）

CONTENTS

◇特集　春休みに読むべき一冊◇

思い込みを乗り越えるファクトフルネス　加藤英介・・・・・・・・・・　２
教師にとって大切な教育技術「発問」と「子ども理解」を深める　福島　尚・・・・・・・・・・　４
「学力づくりで子どもが変わる」（著　久保齋）　図書啓展・・・・・・・・・・　６
「完　子どもへのまなざし」（著　佐々木正美）　小川慶子・・・・・・・・・・　８
「心療内科医が教える　本当の休み方」　吉田雅直・・・・・・・・・・１０
読んでもすぐには役に立たなさそうな本の紹介　堀井克也・・・・・・・・・・１２

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える65「意欲格差」に負けない！公立小学校へ　岡本美穂・・・・・・・１４
考える力をつけるための授業の組み立て方⑦学級づくりに活かすための道徳授業のしかけ　荒井賢一・・・・・・・１８
社会科(歴史)授業力アップ講⑭教材研究②　深澤英雄・・・・・・・２１
学力研　第十七期　先生のための学校（オンライン）第六回報告　鈴木基久・・・・・・・２３

局長・常任委員長だより　・・・・・・・・・・２５
学力研カレンダー　・・・・・・・・・・２６

思い込みを乗り越えるファクトフルネス

加藤　英介

はじめに

教室を見渡してみると、さまざまな児童がいる。学習に対して、真面目に取り組みたいと意欲的な子、友達と外で遊ぶのが楽しみな子、苦手なことでもできるまで努力をする子、効率重視の子など一人ひとり学力も性格も当たり前のことだが違う。だからこそ、教師が果たす役割が非常に重要であると思う。子どもたちの個性をいかに理解しつなげるか、苦手なことをどうやってサポートしていくのかは子ども自身ではなかなか難しいだろう。

現在六年生四〇人の担任をしている。その中には、教師の指示に対して素直に聞くことができず反抗してしまったり授業中であっても立ち歩いて好き勝手話してしまったりする子もいる。先生方の中には「教師の指導力が足りない」「もっと厳しく指導しないからだ」と思う人もいるかもしれない。数年前の自分も少なからず思っていた。しかし、実際にこのような問題のある子に出会って分かったことは、厳しく指導しても、いくら話をしても効果はあまりないということだ。そんな悩んでいるときに出会った本がこの「ファクトフルネス」である。

ファクトフルネスとは？

ファクトフルネスとは「間違った思い込みをやめて、事実に基づく見方をする」ということである。本の中に書かれている例をいくつか紹介する。

問題①

世界の中で、低所得国に暮らす女子の何割が、初等教育を修了するでしょう。

A　二〇%
B　四〇%
C　六〇%

問題②

世界中の一歳児の中で、何らかの病気に対して予防接種を受けている子どもはどのくらいいるでしょう。

A　二〇%
B　五〇%
C　八〇%

読者のみなさんはどれを選んだのだろうか。きっと、多くの人が間違える。（答えが気になる方は本をご購入ください）どれほど優秀な人でもだ。何も知らないというより、みんなが同じ勘違いをしているといった方が近いのかもしれない。そもそもなぜ間違えてしまうのだろうか。それは圧倒的な知識不足が原因である。

この本の冒頭を呼んで、思わずはっとしたことがある。それは、教室でも同じことが言えるのではないかということである。問題行動に対してその子が悪いという見方が間違っているのではないか。その子が産まれ育ってきた環境はどうだったのだろうか。自分自身、圧倒的にその子に対しての知識不足が原因ではないかと考えた。振り返ればそれまでの自分は「聞いてもらえて当たり前」「教師が言ったことに対してやることが当たり前」という考えが自分の中での普通だった。だから、聞かないことに対して厳しく指導していた。よいと思

うことをすればするほど、より反発しさらに悪化していったのである。

本を読み終えてからは、考え方を変えた。問題行動を起こしたくなる原因はどこにあるのか、昨年度はどんなことで癇癪を起していたのか、どんなフレーズが気になるのかなど、分かっていることをとにかく書き出した。

- 去年は大声で長時間指導されていた
- 自分の話は聞いてもらえない
- 先生なんて話しても無駄と思っている
- 学習で理解できないことは助けてほしい
- 課題を終えた後に余白があると遊ぶ
- 授業中に指導をすると反発する
- 発表はしたい。目立ちたいという思い

という形で書いていくうちに改善策も見えてきたのである。例えば「去年は大声で長時間指導されていた」というのを言い換えると「短く小さな声で伝える」となる。「自分の話が聞いてもらえない」を「とりあえず受け止める」という方法で取り組んでみた。また、周りを笑わせようとふざけた発表をしたときには、あえてスルーをして無言で待つなど周りが囃し立てることはいけないということを態度で示した。それを続けた結果、以前よりも若干聞けることが増えてきたのである。もちろん、全てが変わるわけではない。立ち歩くことも反発することもある。だが、教師のいうことを十あるうちの2つ3つ聞けるようになってきたのは大きな進歩である。

また、保護者対応・連絡の仕方も変えた。迷惑をかけてしまった後に報告するのではなく、よいことやできることが増えたとき、周りに感謝されたときなどその子が善い行いをしたときにも連絡をするようにした。連絡を続ける中で、学校に対して不信感しかなかった方も「先生、実は家でも困っているんです…」と本音で話をしてくれるようになった。そのときには「お母さん、いつも大変な中、学校に送り出していただきありがとうございます。一番困っているのは本人かもしれませんね。本人が気持ちよく過ごせるように学校でも声をかけていきます。一緒にがんばっていきましょう。また、何かあればいつでも連絡ください。」と同じ目標に向かってともに歩めるような言葉をかけた。続けていくと、少しずつだが、変化は起きる。保護者から連絡が来たり、本人がイライラしているときには、正直に話してくれたりと成長している様子が見えるようになった。いや、見えるようになってきたという言葉が正しいのかもしれない。

ここに書いてあることは、教師として当たり前のことかもしれないが、言葉で理解していても実際に起こるとなかなか対応はできないものである。冷静に話をしたくても、暴言・暴力をされては冷静になることは難しいだろう。そんなときには「困っているのは本人であり教師や保護者ではない」という視点で物事を俯瞰してみることをおすすめする。仮に「死ね」という言葉を言われた時には「助けてほしい」という合図なのかもしれないと思いつつ対応してみてはどうだろうか。真実を見極めるのは非常に難しい。人を変えることはさらに難しい。ただ、今目の前の子どもたちを成長させることができるのはあなた自身であることは変わらない事実である。

おわりに

普段から、学力研の先生方のお話を聞いたり学んだり、あらゆる方と仕事をする機会に僕自身恵まれている。本には書かれていないことも、悩みを相談する中で知ることができた。だから、今現在も教師を続けてこられている。学力研の先生方には心から感謝したい。

教師にとって大切な教育技術「発問」と「子ども理解」を深める

福島　尚（神奈川県）

一年の終わりが近づいていますが、みなさんにとってこの一年はどのような年だったでしょうか。やっと終わった、と思ってもすぐに四月から新しい一年のスタートになるわけですが、授業での発問の仕方や児童理解の新しい視点の発見となる、おすすめの二冊を紹介したいと思います。

一冊目は、筑波大学付属小学校 盛山隆雄先生の『思考と表現を深める　算数の発問』になります。

この本は、初任の方からベテランの方まで、どの方にも読んでいただきたい一冊です。いろいろな指導法について書かれている本もありますが、この本は「発問」のことだけについて書かれています。そもそも発問とはどういう言葉なのか、という基本的な話から、「発表・検討場面で使う発問」「振り返り、統合・発展場面で使う発問」など、様々な学習場面で行った発問とそれに対して子どもがどのような反応をしたり、思考をしたりしたのか、変容と共に分かりやすく書かれています。

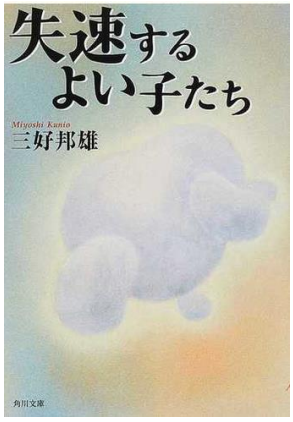
その中で印象的だったものは、盛山先生が独自で考え実践されている**【問い返し発問】**というものです。私たち教師は授業のねらいを達成するために、児童の思考が促される「主発問」を考え投げかけていると思います。主発問と異なり、盛山先生が定義する**【問い返し発問】**は、**子どもが既に分かっていること、もっていることを引き出すことを目的**としています。では、どのような違いがあるか、例として一年生の授業が紹介されています。**【**1～9の数字カードを当てはめて、「□□－□＝7」の式をいろいろつくろう**】**という問題を提示したときに**主発問を「これらの式をきれいに並べられるかな？」**としたとします。すると、子ども達は数字の大きさに着目しながら並べかえるでしょう。そして、並べた後に**【どうしてこのように並べたの？】**と投げかけます。このように、子どもの操作やパフォーマンス全体について問い返す必要があるときに用いる言葉を**【問い返し発問】**として盛山先生は実践されています。このときは、カードの並べ方についてその意味を問うためのものとして投げかけていますが、それ以外に「解釈を引き出す」「数学的な態度を引き出す」**【問い返し発問】**などもあります。この本を読むことで、新しい見方・考え方にみなさんも出会えると思います。

そして、盛山先生は本の最後に、

「問い返し発問をより意図的に、また目的を意識して用いるとすれば、子どもの反応を方向づける問題提示や板書などとの関連を考えることが重要になります。」

と書いています。今年度の授業を振り返り、どのように投げかけ、取り組ませていくか新年度のヒントになる一冊です。

二冊目は、小児科医の三好邦雄さんの「失速するよい子たち」という本になります。学校だけではなく、普段の生活の中でよく聞く「あのこはいい子だから」という言葉。そういわれる子どもたちが、実はどのようなことを抱えているのか、小児科医として様々な子どもたちを見てきた三好さんが関わったケースについて書いている本になります。この本は、平成八年に出版されたものですが、三十年たった現代においても通じるものはたくさんあります。クラスでも、今まで普通に登校していた子どもが急に不登校になってしまうということは、どこの学校においてもあることだと思います。特に原因があるわけではないのに、どうして?と教師も保護者も首をかしげてしまう。本人に聞いても、「よく分からない」という言葉が返ってきてしまう。そのような子どもたちのことを理解する一冊だと思います。



この本の中で三好さんは、【オトナ子ども】という言葉を使っています。それは、家庭で、学校で、大人に対して「よい子」でいることを頑張る子どもたちのこととして定義しています。そのような子どもたちは、「よい子」でいようとするがために常に緊張し、枯渇するまでエネルギーを使っている。では、そういう子どもたちと接している親や教師はどのようにしていけばよいのか、そのヒントとなることがこの本の中にたくさん散りばめられています。

例えば、ある五年生の女の子のことが書かれているのですが、その子は努力家で成績もよくどの子とも仲良く過ごし、誰からも「優秀な子」と思われている子でした。そのような子のエネルギーが枯渇してしまうなど、誰も予想していなかったのに・・・という事例ですが、皆さんでしたらまずどのように対応するでしょうか。何か嫌なことがあったのでは?家庭環境は?というようなところから原因を探っていくのではないでしょうか。「誰とでも明るく仲良くできる子」と周りは認識していたことが、実は本人にとっては他人に対する気遣いをサービスだと思いながら行動している面があるということ。つまり、そのこと自体が精神緊張のもとで、疲労につながりその結果エネルギーが枯渇してしまうことになっていく、ということを三好先生はおっしゃっています。これは一つの事例ですが、読み進めば進むほど【このような視点からも考えなくては】と思うことや、【その考えはなかった!】の連続です。また、教師だけではなく親としても大事な視点や考え方なども書かれています。三好先生は本の最後で

「学校は、あくまでも勉強するところだと思います。それには、親たちは、しっかりと子どもたちを子どもらしく育てて、元気はつらつ、遊び大好き、友達大好き、の人間にして、六歳の四月に小学校の校門をくぐらせなければ、なりません」

と書いています。教師だけの共通認識ではなく、保護者ともどのように子どもを育てていくか、共に考えていく必要があるということを投げかけているように自分は感じた一冊です。

「学力づくりで子どもが変わる」　久保　齋　著

図書　啓展（ずしょ　ひろのぶ）大阪みなみ学力研

春休みは忙しい。新学期を迎える準備もたくさんある。あり過ぎる。

そんなときだからこそ、「学力研・先生のための学校」校長・久保齋さんの「学力づくりで子どもが変わる」～学習能力を育てる授業づくり（子どもの未来社）を一読されることを勧めます。一年間の実践の指針になります。

久保さんが学力研の事務局長をされ油の乗り切った51歳の時の著作です。一言で言って「熱い本」です。2002年初版ですが、今でもアマゾンや楽天市場などで手に入ります。

小学校六年間でつけたい10のカ

あなたは、小学校六年間で子どもにどんなカをつけるといいと思いますか？

久保さんは次のように書いています。

① 一斉授業の中で自分を生かし、自分をきたえることができる力

② 家庭学習の習慣がついており、一日一時間程度のひとり学習ができる力

③ よどみなく音読ができ、はじめての文でも逐語的読解ができる力（読む）

④ ノートを工夫してつくる、学習したことを文章化できる力（書く）

⑤ 小数・分数までの四則ができわり算、かけ算の活用ができる力（計算）

⑥ 授業中、自分の意見を友だちの意見と関連づけて発言でき、司会ができる力（話す）

⑦ 自分の意見と同じところ、ちがうところを整理しながら聞くことができる力（聞く）

⑧ 理科、社会の知識のネットワークを確実につくりあげる力

⑨ 自分に関心をもち、自分をゆたかにきたえようとする力

⑩ 他者に興味をもち、あこがれや共感。ちがいを感じ、交流しようとする力

いかがでしょうか。学習者として自立した子どもを育てることだ、と私は解釈しました。低学年、三・四年、高学年のそれぞれの留意点も述べられ、とても参考になります。

なぜ画期的な提案なのか

これは、学力研にとって画期的な提案でした。なぜならば、「読み・書き・計算」のカだけでなく、「話す・聞く」カ、さらには発達段階に応じた論理性と直観力を加えて「学習能力」と考え、一斉授業の中で学習能力を育てるという提案だからです。

それまで、落ち研・学力研では、ともすれば「読み・書き・計算」の音読や書写、百マス計算などのパーツだけを取り上げてきたえる、という実践傾向がありました。それはそれで、教育実践の名人芸からの解放として「いつでも・どこでも・だれでもできる」という積極面があったのは確かです。家庭塾運動という素晴らしい活動の原動力になったことも確かです。

しかしながら、こと学校教育の本命である授業をどうするかという点では、不十分だったと言えます。

久保提案は、一斉授業の中で学習能力を育てる、つまり学力づくりと授業づくりを統一させるものであったのです。

「読み・書き・計算」に「話す・聞く」を加えることによって、授業づくりを正面に据え、授業の中で学習能力を育てる実践研究、教師の専門性を磨く研究が進むことができるようになったわけです。

読解力と文章化が要

小学校での最大の課題は何でしょうか？久保さんは言います。

「文から情報を得、自分の思いを文で表すことのできる子に育てること」

その考えに立って本書では、「読む」「書く」の要を次のように提起されています。

読む＝読解力にかける

読解力はもっとも大切な学習能力だとし、説明文の授業での読解力のつけ方、読解力をつける日常的な取り組みが書かれています。授業での項目だけを取り出すと、

① 音読の徹底
② 文字言語による発問（発問を板書）
③ 文字言語による回答
④ 回答への受容的態度
⑤ 意見交流の保障
⑥ 教育的変容の奨励
⑦ 正しい回答の提示と説明
⑧ 学んだことの文章化

今、国語科が、調べたことを発表したり、説明文教材がたんなる導入的な扱いを受けたりするような、総合学習化に陥っています。これでは、読解力は育てられません。

本書では豊富な実践例もあり、詳しくは読んでいただくとして、大いに実践の指針になることでしょう。

書く＝文章化にかける

久保さんは言います。

「私は、授業中にその時間の学習が完了できるように、毎時間、授業の最後の五分間に「今日学習したこと」と題して学習内容を文章化させることにしました。

『家の人に自分がきょう学習したことが伝わるように書きなさい』

と指示します。めやすとして、「学習内容を七割、感想を三割」ということもいっておきました。

書けた順に子どもたちの文を読んで丸をつけながら、大きい声で読んであげました。まだ十分に文章化できない子へのヒントです。

このような方法をとったら子どもたちの学習態度が変わってきました。文章化を意識して、頭の中で整理しながら授業を受けようというかまえが子どもたちの中に生まれてきたのです。」

文章化が認識力を高めることがよくわかります。今や学力研の定番であるノート指導についてももちろん展開されています。

計算で感覚的ルートを習熟させる

「人間の認識には言語的・分析的な認識のルートのほかに別のルート、すなわち感覚的なルートがあるのです。」と久保さんは言います。感覚的なルートの習熟のための方法として、この書で、有名な「トト□の歌」と「たし算九九」を提案。低学年での「できる」を優先することの大切さを説いています。

自己教育力につながる宿題についても、詳しく明快に述べてあり納得できます。

新学期のスタートに備えて、あれこれと考える時期。久保さんの著作を一読されることを改めてお勧めします。

佐々木正美著　「完　子どもへのまなざし」

春日井学力研　小川慶子

今年度も残り僅かになった今、一年を振り返ると、今までとは何か違う違和感があります。

そこで、手に取ったのがこの本です。

今から十年ほど前、雨越先生と一緒に幼児教育の学習会で学んでいたころ出会った本です。「子どもへのまなざし」「続　子どもへのまなざし」との三部作になっていますが、当時は「子どもへのまなざし」を読みながら、自分の子育てを思い出し、大いに反省していました。今回は、当時さっと目を通しただけのこの本をじっくり読むことにしました。

壊れてしまった人間関係

近年、日本の社会では、家庭、隣近所、職場など、人と人の関係が希薄になっている。人間というのは人間関係により人間になっていく。人間関係が壊れてくれば、人間性そのものも壊れてくる。豊かな人間関係を失いがちな日々の生活の中で最も生きにくく、被害を受けているのが、子どもや青年たち。将来を担う彼らが健全に育たない社会は、その構成員の全てにとって不幸なことになる。

子どもの幸せとは

子どもたちが健康で幸福に育っていくために一番大切なことは、「社会的な人間関係の発達」。これは、お母さんを信じることから始まる。お母さんから自分が望んだような愛され方をした子どもたちは、最初に出会った人（お母さんやお母さん代わりの人）に対する豊かな信頼感をもち、それが自分への信頼や自信につながる。それからお父さん、お爺ちゃんおばあちゃん、そして隣近所など地域の人たちと出会うことによって、多くの人を信じる力が育っていく。

この人を信じる力、自分を信じる力が、エリクソンのいう「基本的信頼感」。

大人たちの現状

戦後、日本人の多くは、自分の気持ちに偽りなく、自分を大切にする生き方を個人主義に求めた。ところが、あるところから健康な個人主義（相手の個人主義を尊重することによって成り立っている）を通り越して「自分だけがよければいい」という感情や生活の仕方を強く持つようになった。相手を尊重しない個人主義は、利己主義、自己中心主義。自分の生き方を最優先にして、他者との関係を煩わしく思う反面、他者からは受け入れられたいという希望は強い。当然、対人関係はうまくいかないし、人間関係も希薄になってきている。

子育てには、「子どもが望んでいるような愛し方をしてあげる」ことが必要だが、現代の親は自分の生きがいを優先にするあまり、自分が望んでいるような子どもにした

いという育児になっている。

ありのままに受容すること

ありのままの自分を受け入れてくれる人に出会うことにより、子どもは相手と共感する感情を育てることができる。この共感性という感情があるから、相手に対する思いやりとか、相手の喜びをを自分の喜びにすることができ、大きくなるにつれて、相手の悲しみ、苦しみを思いやることができる感情へと発達させることができる。

現代の親たちの苦しみ

日本の親は、子どもから愛されたいという感情が強い。その感情の変形が、自分の望むようなこどもになってほしい、さらに変形すると、自慢の子どもになってほしいと思う。幼い時はまず、自分の望んだような赤ちゃんになってほしいと思う。だから、親の要求ばかりを子どもに伝えるが、幼い子どもは応えられない。すると、親は子どもから拒否されているような気持ちになり、激しい苛立ちの感情をもつ。こういうとき、感情のコントロールが悪い人は、子どもを虐待しやすい人。また、虐待を受けた人は愛情に飢えているから、愛情に対する欲求が強い。自分が愛されることに大きな関心がある。

「こういう子どもならいいが、ああいう子どもはいやだ」「いうことをよく聞くペットはかわいいが、思い通りにならない子どもはかわいくない」ということを平然と言ってのける親もいる。

また、日々の生活の中で何か不快なことがあると、その理由を自分以外の他者や世間に求めたり、十年前の高校生のアンケートにあった、「本人の自由だ。勝手だ」という主張を思い通りにならないときの言い訳にしたり日本人全体が自己中心的な人間性になってきている。

昨年度で再任用は終わり、今年度からは講師として三年生を担任しています。欠員補充として四月十四日に赴任した学校は、何か違和感がありました。一年近く経ち、その正体が見えてきました。この本は、二〇一一年に発行されていますが、ここに書かれているいくつかの症例がものの見事に目の前で繰り広げられていたのです。

私のクラスにも、気にかかる子どもがいます。母親の関心を自分に向けようと必死です。お母さんの冗談かもしれませんが、「あなたより仕事が大事」「あなたよりペットの犬のほうがかわいい」と言われたようです。冗談でも言ってほしくない言葉です。

また、発達障害の子どももいます。ゆるやかに寄り添い、助けられるように接してきました。理解し合えるようになった今は、毎日が安心して過ごせていますが、3クラスから2クラスにたたむ学年なので、新学期が心配です。

子の本と再会し、頭の中を少し整理することができました。

子育てや教育は、発達障害のあるなしにかかわらず、すべての子どもや大人にとっても、今の状態をまず受け入れることから始まります。響き合う心をもってお互いに理解し合い、ともに健康で幸せな日々を過ごすことができるよう、研鑽を積み、日々の実践に繋げていかなければと痛感しました。

「心療内科医が教える　本当の休み方」

大阪　吉田雅直

今年度はストレスから体調を崩してしまうということがあり、心と体の健康を維持しながら仕事を続けていくことの大切さを痛感させられました。そこで出会ったのが心療内科医である鈴木祐介さんが書かれた「本当の休み方」という本です。ストレスの多い教師という仕事だからこそ、その正体と仕組みを知り、ストレスと上手に付き合えるようになることは大切な「仕事」のひとつなのではないかと感じています。また、教師だけではなく、子どもたちや保護者も様々なストレスにさらされながら精一杯生きています。それを理解することは子どもたちと向き合い、保護者と対話するために必要なのではないでしょうか。「まとまった休みなんか取れない」という方も、休みの「質」を見直すことで、一日でも効果的に心と体を回復することができます。専門的な知識がなくても一日で読み切れるので、忙しい春休みにもおすすめです。

身体はストレスをごまかそうとする

人はストレスを感じるとアドレナリンなどの抗ストレスホルモンを分泌し、ストレスに抵抗しようとします。これは約三か月もつので、その間はストレスを感じているけど「なんとかやっていける」という感覚だそうです。しかし、これはいわばドーピング状態で、実際はダメージがじわじわと蓄積されています。そして、三か月たって抗ストレスホルモンが枯渇すると、一気に自覚的な疲労感と様々な身体症状が襲ってくるそうです。身体化すると回復にも時間がかかってしまうので、「まだ大丈夫」と思えているうちにしっかりと休みを取ることが大切です。私も「まだまだいける」と思っていた矢先に突然体調を崩してしまいました。子どもたちも急にしんどくなったり不登校になったりする（ようにみえる）ことがありますが、実はその何か月も前からストレスに抵抗しようとがんばってしまっていると考えると、小さなサインを見逃さずに、早い段階でしんどさに気づき、寄り添ってあげられるようにしたいものです。

ストレスの要因

ストレスの要因（ストレッサー）には大きく分けて二種類あります。ひとつは「ライフイベント」つまり生活における大きな変化によるストレスです。私の場合「転勤」ということが大きなストレスになっていたと思われます。「早く新しい環境に適応してがんばらなければ」という気負いもストレスを感じにくくさせていたのかも知れません。子どもたちにとっても新学期や夏休み明けなどは想像以上に大きなストレスになると思われます。また、ライフイベントはしんどいことだけではなく、楽しいことでも「非日常」ということでストレス要因となります。大きな行事やイベントで盛り上がったりした後も、注意が必要です。

もうひとつは「デイリーハッスルズ」と

いわれるものです。これは、日常の小さなストレス要因の積み重ねによるものです。ちょっとした「イラっ」が無意識のうちに積み重なり、いつの間に大きなストレスとなってのしかかるというものです。原因を特定しやすいライフイベントとちがい、ストレス要因として意識しにくいだけにやっかいです。対策としては言語化することで意識化するといいそうです。怒りを感じること自体は悪い事ではないので、自分の感情を素直に受け入れることが大切です。これは子どもたちにも有効で、「なんかわからんけどももやもやする」感情を「○○されていやだった」「くやしかった」「悲しかった」「腹が立つ」と言語化することで自分の気持ちを外部化し、客観視できるようしてあげることが必要です。友だちに手を出してしまったことはだめだけど、「怒り」の感情そのものは否定せずに、寄り添ってあげることが大切なのではないでしょうか。

ストレスと自律神経

自律神経とは、意思とは関係なく働いている神経で、「アクセル」担当の「交感神経」と「ブレーキ」担当の「副交感神経」のバランスで成り立っています。これまでは、ストレスに対して交感神経が働いている状態が「バトルモード」で、ストレスがないリラックスした状態では副交感神経が働く「休息モード」になっているとされていました。これは、「敵から逃げる」「攻撃する」という瞬間的なストレス反応を説明するには有効なのですが、現代のストレスは、つらい人間関係やしんどい仕事など、軽いストレスが長期的に続くものが多く、交感神経と副交感神経の二元論では説明がつかないそうです。そこで提唱されているのが、ストレス反応を「アッパー系」と「ダウナー系」に分ける考え方です。アッパー系とは、ストレスに対して怒りや攻撃で対応する「炎のモード」です。ダウナー系とは、フリーズしたり、感情をシャットアウトしたりすることで対応する「氷のモード」です。そして、リラックスモードは、その中間地点にあるという考え方です。そして現代社会では大人も子どもも、長期間続くストレスにさらされ続けることによって「氷モード」から抜け出せなくなっていることが多くなっているそうです。確かにひと昔前は「キレる」子が問題になることが多かったですが、最近は「無気力」「無反応」な子どもたちが増えてきているように感じます。これも「氷モード」というストレス反応のひとつだと考えると、また違ったとらえ方ができるのではないでしょうか。

　完全にストレスフリーな生活はあり得ないし、ストレスに対して反応すること自体は健全なことです。しかし、ずっと「炎モード」だと疲れ果ててしまうし、「氷モード」から抜け出せないのも辛いです。大切なのは、一時的に炎や氷モードになったとしても、リラックスモードに戻れることです。そのための具体的な手立てもたくさん書いてあるので、参考にしてください。そしてリラックスモードに戻る最大のポイントは「安心」だそうです。たったひとりでも心の底から安心できるつながりを持てるかどうかがストレスと付き合う上で大切です。子どもたちの「安心」と「つながり」をつくりだせるよう、まずは自分のストレスとしっかりと向き合い、うまくコントロールできるようになりたいと思っています。

読んでもすぐには役に立たなさそうな本の紹介

春日井学力研　堀井　克也

今月号のテーマは編集担当である私が考えたのですが、なぜ本について取り上げようと思いついたかというと、いくつかの「読書会」に参加するようになったことがきっかけです。一つはオンラインで一緒に勉強している方々との読書会、もう一つはＰＴＡの読書同好会、そして職場の自主学習会の中で開いた読書会です。そうした場で「みんなで同じ本を読んで語り合う価値や楽しさ」を実感したので、学力研の先生方とも同じ本を読み合ってみたいと思いました。

残念ながら同じ時間に同じ場所に集まって語り合うことはできませんが、ぜひ今月号で紹介された本の中の一冊でも手に取って、読んで、何かを感じたり、学び取ったりしていただきたいと思います。

言い出しっぺの私からは、読んでもすぐには役には立たなさそうだけれど、ぜひ読んでもらいたい本を三冊紹介します。

『授業入門』斎藤喜博

私が職場で若手の先生方と読書会をしようと提案し、手元の本をあれこれ並べて紹介していたところ、六年目の先生が「堀井先生が前からよく話題にしていた斎藤喜博のこの本が気になります」と言ってくれたので、課題図書にした一冊です。

読書会では、各自が読んでいて心に残った部分を共有したのですが、やはり「授業というものに対する意識レベルの高さがあまりにもすごくて、背筋が伸びた」という意見が多かったです。「そんな授業をしていていいのか、と叱られたような気がした」という先生もいました。

確かに、この本が書かれた頃とは時代も子どもも教育環境も違いますが、本質的に大切なこと、根本的なことは変わっていないのではないかと感じます。「子どもは教師次第で良くも悪くもなる」という金言を胸に刻んでおくだけでも、日々の教育実践は変わると思います。授業というものに高いイメージをもち、そこへ少しでも近づこうと切磋琢磨する教師になるためにも、ぜひ多くの人に手に取って読んでみてもらいたい一冊です。

斎藤喜博の『授業三部作』はどれも必読、私も春休みに再読しようと思います。

『私たちはどう学んでいるのか』鈴木宏昭

最近、ヴィゴツキーの解説本や今井むつみ先生の本を何冊か読んで、「そもそも学ぶとはどういうことなのか」という原理的なことを学んでいます。この本は、一部がネットに掲載されていたのを読んで興味をもったため、読んでみました。

第一章のタイトルが、実にパンチがきいています。ズバリ、「能力という虚構」です。教員の世界では、多種多様な「○○力」「○○能力」が提起されていますよね。思考力、判断力、表現力、読解力、計算力、想像力、問題解決能力…このように、人の心と頭の働きを「能力」として捉えることの危険性を著者は主張しています。なぜかというと、そのような捉え方では人の認知の特徴であ

る「文脈依存性」を説明できないから…だそうです。

本文中に論理的思考力を図るための例題が示されているのですが、そこでは「よく似た構造の問題なのに、問い方が変わるだけで正答率が大きく下がる」という現象が説明されています。実際に、私も間違えました。論理的思考がうまく機能するかどうかは文脈によるところが大きく、論理的思考力というものが安定して発揮されるというのは幻想に近い誤りであるというのです。これは、我々教師が子どもの学習上のつまずきを分析する上でも、非常に参考になる知見なのではないでしょうか。

二章以降も「知識は伝わらない、知識は構築されるもの」「上達するとはどういうことか」などの、教師であれば心を惹かれるような内容が並んでいます。読んでいると、久保先生をはじめ学力研の先生方が良く話されていることと重なる部分もあったりして、興味深く読み進められました。

今井むつみ先生の本もそうですが、こういう認知心理学について書かれた本を読んで原理的なことを学んでも、明日からの授業がすぐに大きく変わるわけではありません。しかし、少しずつではあるものの確実に、目の前の子どもの姿の解像度が上がる実感が得られます。春休みにこそ、こういう急を要しない読書に勤しみたいですね。

『世界は贈与でできている－資本主義の「すきま」を埋める心理学－』

読んでもすぐには役に立たなさそうな本という視点で言えば、これが一番です。ただ、最近読んだ本の中では最も衝撃を受けた本で、人にもどんどん薦めています。

小学校教師をしていると、子どもたちが生きるこれから先の時代はどうなっていくのだろう?どんな世の中になっていってほしいのだろう?そんなことをふと考えることがあります。そんな私は、以前から内田樹氏の贈与論に心惹かれていました。だから、この本のタイトルに魅力を感じました。

この本では、「ぼくらが必要としているにも関わらずお金で買うことのできないもの及びその移動」を「贈与」と名付け、その原理について解説していきます。資本主義全盛の時代にあって、資本主義の原理では説明ができない現象に意味が与えられていきます。読んでいると、ワクワクします。そしてふと気付いたのです。「あぁ、教育を贈与と考えると、しっくりくるなぁ」と。これまで私はよく「趣味で先生をしています」と言ってきました。確かに給料をもらってはいますが、お金のためにしている意識はあまりなく、ただ子どものためになることをしたい一心でした。これを何と呼ぶのかわからず「趣味」と読んでいたのですが、「贈与」と考えると納得できました。

自分語りばかりになって恐縮ですが、志を同じくする先生方に読んでいただければ、きっと勇気づけられること請け合いです。途中ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論という少々難しい話も出てきますが、そこを突破して最後まで読み通していただければ、きっと大切な何かを受け取っていただけると思います。本当にお薦めです。

この本を読んで以来、クラスの子どもたちにも「贈与・贈り物」という言葉を使って語るようになりました。挨拶も、褒め言葉も、励ましも、みんな「贈与」。どれだけ贈り物ができるかな…と問い続けたら、温かいクラスになっていきました。

「どの子も伸ばす」を本気で考える連載　65

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長　岡本　美恵

■「弱いロボットだからできること」（東京書籍）

1　単元の計画（全6時間）

1. 範読を聞き、初発の感想を書く。
2. 初発の感想交流後、学習の見通しをもち、学習計画を立てる。
3. 「弱いロボット」の特徴についてまとめる。
4. 筆者の主張を捉え、自分の考えをまとめる。
5. 資料「テクノロジーが見せる未来」を読み、自分の考えをまとめる。
6. 学習しての感想や意見を伝え合う。その後単元を振り返る。

2　板書の基本

本単元では、「筆者の考えから自分の考えを広げることができる」ことをめざして単元計画をたてました。本教材を通して、身近な生活にあるテクノロジーの進歩について、異なる立場の2つの教材を比較しながら読み合い、共感したり、納得したり、異なる意見をもったりすることで、筆者の考えと比較しながら自分の考えを明確にもち、文章にまとめる力を育てていくことをめざします。

そのために、子ども達はそれぞれの文章の要旨を把握し、事例と自分自身の経験とを結び付けながら、共通点や相違点を理解して読むことが求められます。そこで経験を言語化したり、本文から考えたことを友達と伝え合ったりし、その内容を板書していくことで、説明文が難しいと思っていることもたちであっても身近な話題として受け止めて考えられるように板書計画をたてました。

《板書のコツ1》

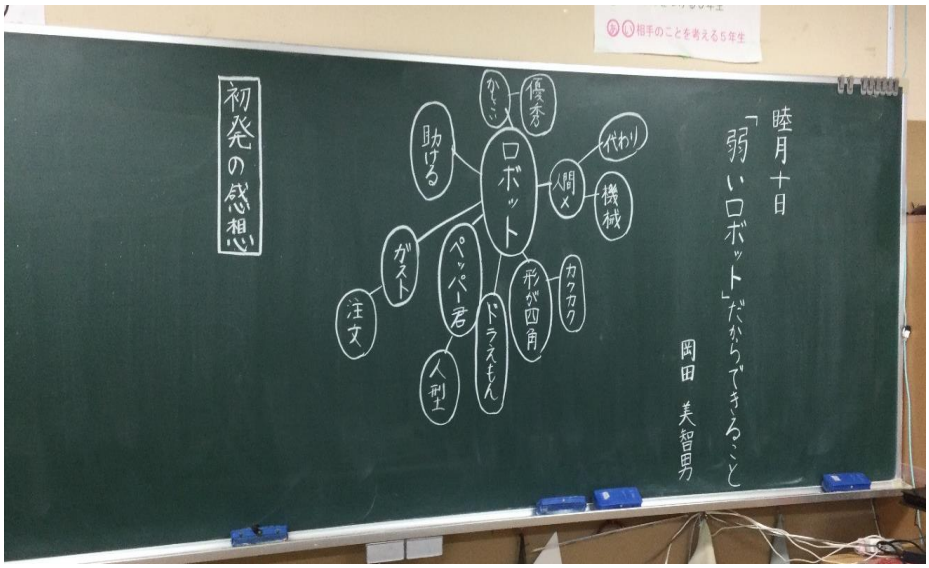
1時間目

初発の感想を書く前に、子どもたちが混乱することなく、自分の考えをまとめられるように思考ツールを活用しました。「ロボット」について知っていること、イメージすることを話し合いながら、板書でまとめていきました。話し合いの中では、子どもたちの経験が根拠となる意見が出されることもあります。その意見も大切に板書に書くことで、話し合いを進めた後に「初発の感想」を一人ひとりが書きました。

■イメージマップをいかした板書

イメージマップとは？

イメージマップとは、言葉で子どもたちの発想を広げていく思考法のことです。特別な技術は必要ない



ので、どの学年でも実践することができます。

中心テーマを黒板の真ん中に書き、丸で囲みます。そこから周りに書いていくことで、より細かい内容が書き加えられていきます。イメージマップは子どもたちの発想を広げるうえ、友だちの意見を聞いて自分の考えを深めることもできる方法です。子どもたちの頭の中には、テーマをきっかけにたくさんの言葉がシャボン玉のように生まれては瞬く間に消えてしまいます。消えるまでに板書を使って文字に表していくことが大切です。

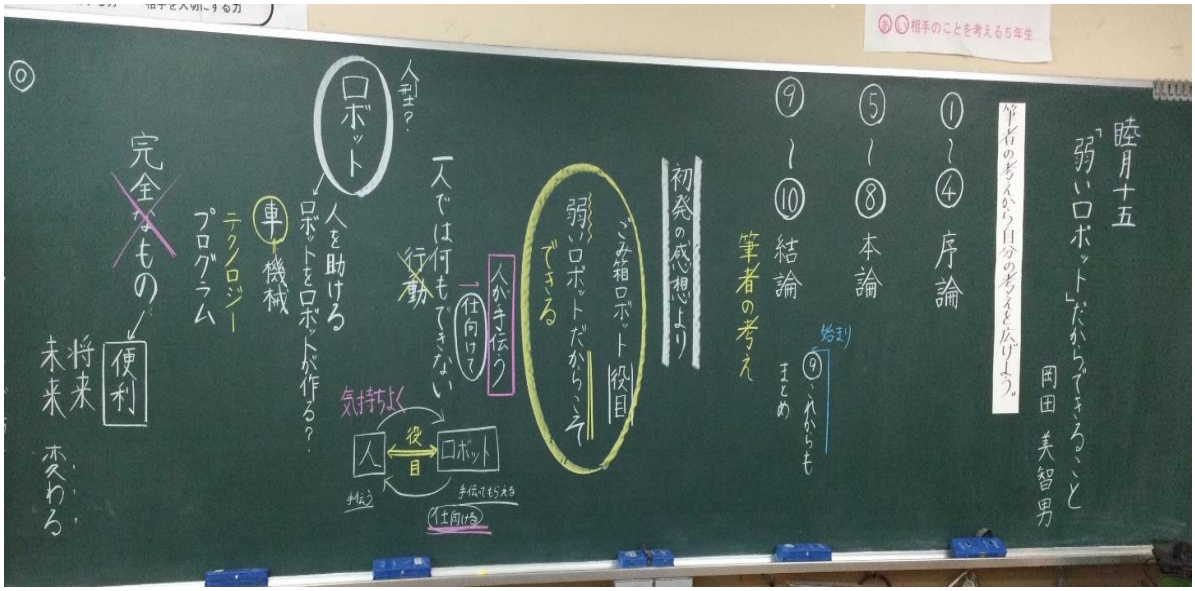
《板書のコツ2》

2時間目

この時間は初発の感想を交流することで、学習の見通しをもち、学習計画を立てることができるようにしました。

まず、子どもたちにはこの単元でつけたい力は「筆者の考えから自分の考えを広げる」ことだと伝えノートに書くようにしました。そして説明文の基本である「文章の構成」について整理しました。序論・本論・結論について確認した後に、結論に「筆者の考え」が書かれていることも確認しています。この確認作業は「さかのぼり学習」と位置づけています。国語の用語などは、日常生活で使う機会があまりありません。説明文の学習をする際に何度も確認することを積み重ねていくことが大切だと考えています。

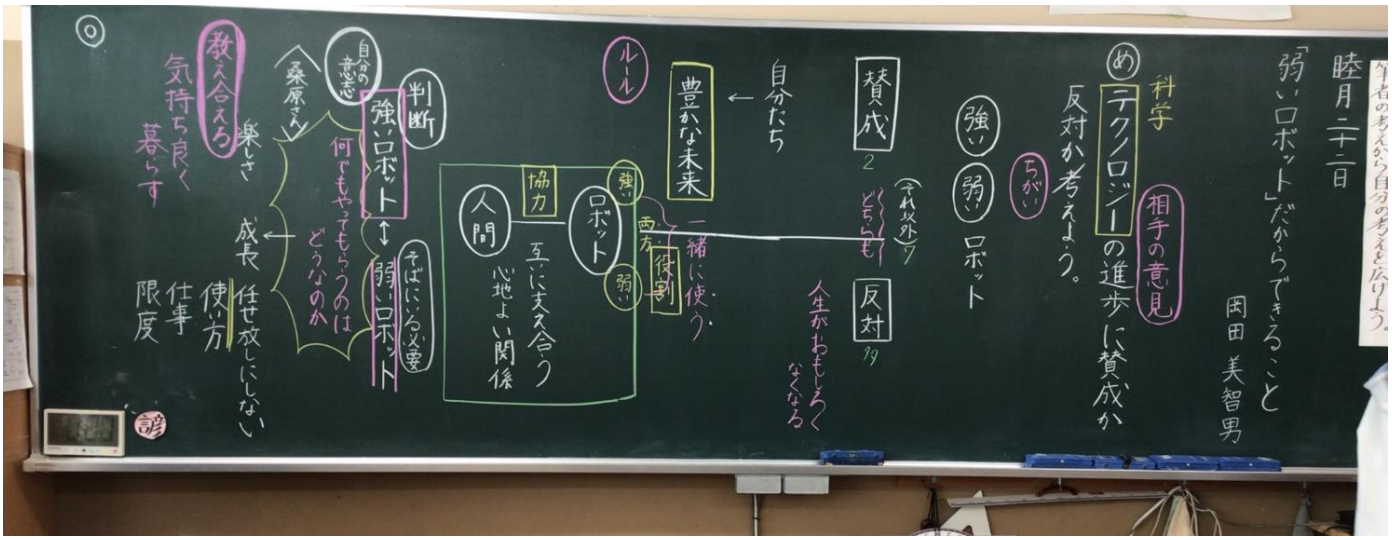
この部分は子どもたちが交流する中で、黒板に書いて説明したものです。教師だけが板書するのではなく、子どもたちにも解放していくことでみんなで板書を完成させていく、みんなで板書を書く、という文化が学級にできることをめざしています。それが話し合い活動では大事なポイントだと考えています。



5時間目

めあては「テクノロジーの進歩に賛成か反対か考えよう」です。子どもたちは資料を読み、賛成か反対か立場を決めます。

賛成と反対を上下で板書していくことで、比較して考えることができます。そして最後は、そこから自分が考えたことを交流することで「自分の考えを広げる」機会にしています。今回は板書でピンクのチョークをたくさん使っています。今回ピンクのチョークでは「子どもたちの意見」「考え」を書きました。



6時間目

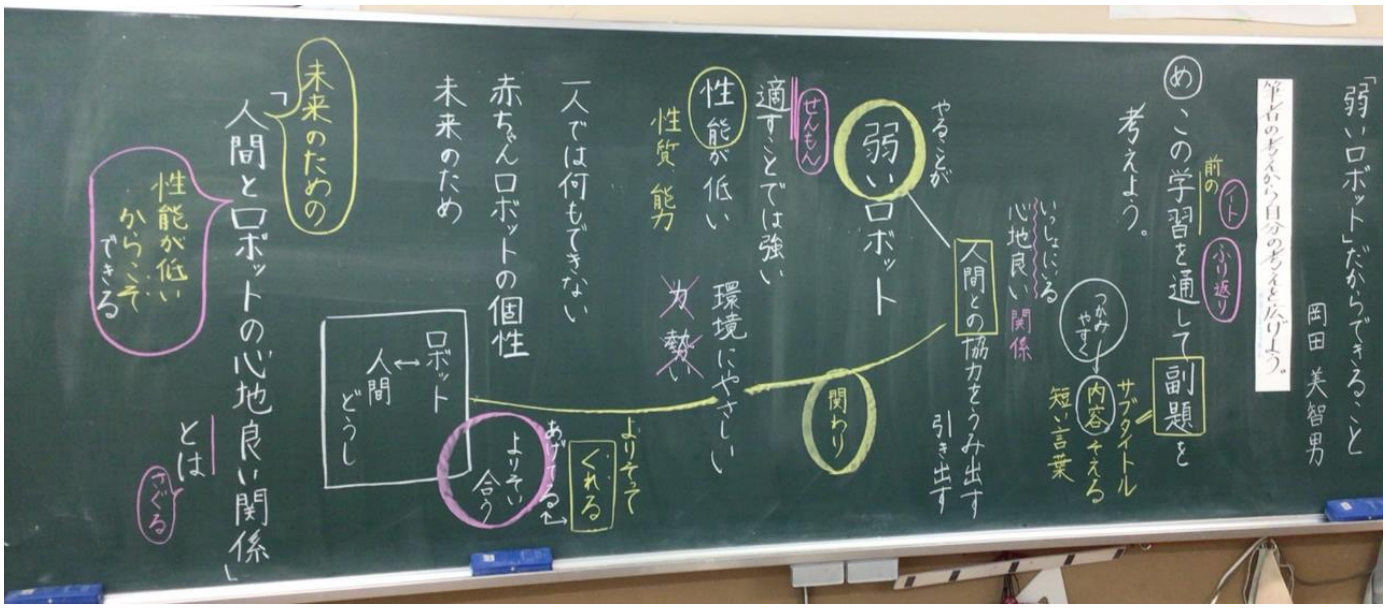
めあては「この学習を通して副題を考えよう」です。まとめの学習として副題をつけることにチャレンジしました。「弱い」という言葉を別の言い方で表現するとどうなるでしょうか?と発問したところから始まっています。これを問うことで、筆者が伝えようとしていたこと、そこから学級みんなで考えてきたことがより明確になりました。今回みんなで考えた副題は「未来のための人間と性能が低いからこそできるロボットの心地よい関係とは」です。

副題にしては長いのですが、副題を考える過程が大事だと考えています。だからこそ、副題が出来たときにはみんなで「おーー」いいね、と板書を見ながら喜び合いました。これがみんなでつくる国語の授業だと考えています。

このように毎月

https://kyoiku.sho.jp/special/13793/

にて、見やすく理解しやすい「単元別 板書の技術」京都女子大学附属小学校特命副校長 吉永幸司監修で特集していただいています。



考える力をつけるための授業の組み立て方⑦

学級づくりに活かすための道徳授業のしかけ

大阪教育サークルはやし　荒井　賢一

道徳の教科書の教材文の中には、学級づくりに活かせそうなものが多くある。

今回、紹介する教材文は、『小学 道徳ゆたかな心 5年』（令和6年度版、光文書院）のP.116～119に載っていたものだ。

学級づくりに活かすための道徳授業のしかけ

【一】教科書の載っている順は気にしない

この教材文は、学級経営に活かせそうだなと思ったら、教科書のどこに載っているか気にせず、使うのである。

いつそ、自分の学校の道徳教科書にこだわる必要もない。さらに、教えている学年以外でもいいのである。

四月に使える道徳授業「心の管理人」

「自転車に乗ったことがある人？」

乗ったことのない子がいる前提で、次のように問う。

「自転車で出かけるとしたら、どこへ行きますか。」

・コンビニ。　・スーパー。　など

「自転車で出かけたときに困ることは、何ですか。」

ノートに書かせ、列指名や挙手指名で発表させていく。

・パンクすること。
・交通事故にあわないか心配なこと。
・置き場所。　・坂道がしんどい。

【二】生活体験を共有できる場を作る

学級の中には、自転車に乗れる子もいれば、乗れない子もいる。自転車に乗っているとしても、それでどこに行くかは、それぞれ違う。

そのような生活体験の違いを授業の中で出し合って共有することを四月の道徳授業の中では、多いに取り入れたい。

なぜなら、四月はお互いを知り合う時期だからである。

まず、本屋さんへ行きました。

右のイラストをプリントアウトして配付する。

「このイラストを見て、分かったこと、気付いたこと、思ったことを箇条書きしましょう。」

全員参加の授業を目指す上で、よく使うタイプの発問である。

数分後、列指名で発表させていく。

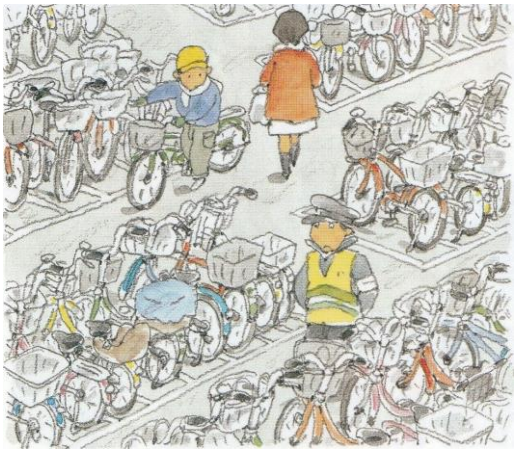
・自転車がいっぱいある。
・自転車を置く場所を探している。
・店の入口に置いたら迷惑。　など

自転車置き場は、目印ロープがはってありますが、自転車はそれに関係なく置かれています。

「ぼくは、どうしたと思いますか。」
（挙手指名）
・置くのをあきらめた。
・ロープの所に置いた。　など

ぼくも適当な所に自転車を置きました。

次に駅ビルによりました。



右のイラストを配付。気付きを箇条書きで書かせ、列指名で発表させていく。

・警備員さんみたいな人が立っている。
・本屋の時と違って、自転車がきれいに並べられている。　など

二つ目の気付きのように、前のイラストと比較した気付きが出たときは、
「原田さんの気付きのすごいところは、どこですか。言える人？」
と問いかけ、
・一枚目のイラストと比べている。
「さし絵が二枚出てきたときは、それらを比較するといいですね。」

【三】別の子の意見の良さに気付かせる

列指名で発表させる場合、その列全員が発表し終えるまでは、教師はコメントしない。その列の発表が終わってから、右のような問いかけをする。

ここの自転車置き場には線が引かれ、管理人さんもいました。きちんと整理されているので、自転車をとめるのも出すのも、とても楽でした。

ここで、本屋の自転車置き場をA、駅ビルの自転車置き場をBとして、
「どちらの自転車置き場がいいですか。」
で選ばせ、その理由を書かせていく。

「AとBどちらがいいか」と聞かれれば、「管理人がいるBがいい」という意見の方が多いだろう。
「なぜ、管理人がいるといいのですか。」
・きちんと管理してくれるから、自転車が出し入れしやすい。
・自転車を盗まれたり、いたずらされたりされにくい。
「では、本屋さんはなぜ管理人を雇わないのでしょうか。」
・お金がかかる。
・管理するほど、自転車が止められないから。
駅ビルは、大きな自転車置き場になっていて、駅にある店全部で、少しずつお金を出して、管理人を雇っているのだろう。
「Aの方がいい。」という意見は少数ゆえに発表しにくいだろう。それでも、意見を求めると、
「Bだと、止めた後、店まで歩くのが遠い。」
「Aはどこでも止められるから楽。」
という経験談が出てくる。
道徳は、理想を求めるものだが、「現実ではどうか」を取り上げないと、机上の空論のような空虚なものになっていく。

【四】道徳的ではない意見も汲み取る

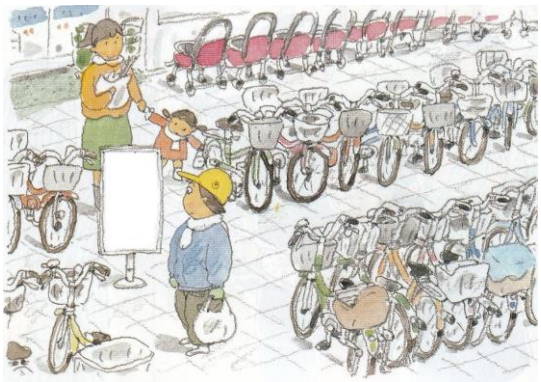
最後に、家の近くに新しくできたスーパーマーケットに行きました。ここにも自転車を置くスペースがあります。ここは、ロープや線も引かれていないし、管理人さんもいません。

「自転車は、どのように置かれていると思いますか。」

・バラバラ。　・乱雑に置かれている。

大人（教師）に問うと、教材文の構成を考えて、「きちんと整頓されておかれている」と予想するかもしれない。

左のイラストを配付する。



それでも、どの自転車もきちんと通路の所を空けて置かれていました。ベビーカーなども置いてありましたが、どれもじゃまにならないように置かれていて、自転車の出し入れがとても楽でした。ぼくは、（どういうことかな。）と思いながら、となりの自転車に合わせて、自分の自転車を置きました。買い物が終わり、自転車の所にもどると、ふと一つの看板が目に入りました。

〈　　〉

「看板には何が書いてあったのでしょうか。想像して書いてみましょう。」

書けた子から板書させていく。

・使いやすい自転車置き場にしよう。

・ここはみんなの自転車置き場です。

・きれいに置いてくれてありがとう。

など

ここで初めて教材文を配付する。

（教科書があるなら、ここで開かせる。）

【五】教科書を開かせるのを後にする

どこで教科書を開かせるかは、授業の構成によって決まっていく。

「何と書いてありましたか。」

〈この場所の管理人はあなたです。〉

「これって、どういう意味でしょう。」

・使う人が管理人のように管理する。

・みんなで管理するってこと。　など

最後に、学校の下足室やトイレのスリッパ、竹馬や一輪車置き場などを提示し、「これらの場所を管理人は誰ですか。」と問いかけて、授業を終える。

【学力研Ｚｏｏｍ例会
３月17日（日）午後２時～３時】

毎月一回、Ｚｏｏｍによる例会を開いています。学力研会員なら参加無料です。

ミーティングＩＤ：６９３０７０６４４２

パスワード：６５３３５９

（今回は、私（荒井）が「学級づくりに活かすための道徳授業のしかけ」について話します。）

また、近況の交流もしています。

社会科（歴史）授業力アップ講座　十四

教材研究②

学力研常任委員　深沢　英雄

一、江戸幕府による大名支配

日本文教出版のI36～I37ページは、「江戸幕府による大名支配」教師用指導書朱書編には、「本時のねらい　大名の配置や武家諸法度などについて調べ、江戸幕府が大名支配を強めていったことに関心をもち、資料から江戸幕府の大名支配について読み取ることができる」となっています。研究編には、教師：幕府や家光がおこなった政治について、思ったことや考えたことをまとめましょう。と発問例があり、児童の発言例がこうあります。子ども：大名行列や武家諸法度など幕府の大名支配は厳しかった。子：大名の種別を分け、差をつけるなど考えた支配をおこなった。子：大名にお金を使わせ、力をおさえるようにした。子・家光は威張っているだけでなく、参勤交代の制度を武家諸法度に入れるなど幕府にとって賢い将軍だった。

・各政策の目的は幕府政権の安定にあることを、幕府政権の安定にどのようにつながるかを考えさせたい。・大名支配の巧みさに気づかせる

とあります。

教科書には、武家諸法度（一部）が箇条書きで資料をして掲載しています。

●大名は江戸に参勤すること

（●は徳川家光が加えたもの）

朱書編では、この資料を見て

子ども：武家諸法度は厳しいきまりだと思う。子：どうして、大名は江戸に参勤交代しないといけないのか。

と朱書編には書いてあります。朱書編だけ読んだり、自分の既習知識から考えると、「参勤交代」とんでもない制度で、幕府の支配を確立するには都合のいい巧みな制度だと思います。子どもなら、「参勤交代、大変だ。大名かわいそう。」と思うことだと思います。

ここで、素材研究で行った、家光が制度化した武家諸法度の条文を見てみましょう。

「一、大名・小名在江戸交替相定ムル所ナリ。毎歳夏四月中、参覲致スベシ。従者ノ員数近来甚ダ多シ、且ハ国郡ノ費、且ハ人民ノ労ナリ。向後ソノ相応ヲ以テコレヲ減少スベシ。但シ上洛ノ節ハ、教令ニ任セ、公役ハ分限ニ随フベキ事。」

現代語に翻訳すると『大名や小名は自分の領地と江戸との交代勤務を定める。毎年四月に参勤すること。供の数が最近非常に多く、領地や領民の負担である。今後はふさわしい人数に減らすこと。ただし上洛の際は定めの通り、役目は身分にふさわしいものにすること。』という意味です。

あれっ、ちょっとちがうぞと思いませんか。

この連載の⑪　素材研究③で紹介したように、参勤交代は「主従関係の確認」が目的で、結果的に各藩の財政が厳しくなり、軍事力を低下させるのにつながっただけで、それ自体が目的ではなかったと考えられて

います。と紹介しました。そもそも各藩の財政が破綻して軍役が不可能となっては本末転倒であることから「大名行列は身分相応に行うべき」と通達を行なっているのです。家光の武家諸法度での参勤交代制度化はルールを定めて各大名同士の過度な競争をおさえようとしたという説が現在有力です。

二、教材の本質をつかむことが教材研究

「参勤交代」が確立したのは江戸時代ですが、その原型は鎌倉時代の「大番役」（おおばんやく）と呼ばれる制度です。大番役は、内裏・将軍の御所、及び市中における警固役のこと。諸国の武士が交代で鎌倉や京都に勤務していました。室町時代になると、守護大名とその子息などは京都に置かれ、将軍に奉公するようになります。「豊臣秀吉」は、「大坂城」（大阪城）や京都の「聚楽第」、「伏見城」を建てるたび、その近くに大名の屋敷を構えさせ、屋敷に大名の子息などを住まわせることで、実質的な人質としていたのです。

「徳川家康」が征夷大将軍になると、多くの諸大名は江戸に出向きました。徳川家康の命により、大名達は江戸に屋敷を構え、そこに住むようになったのです。なかには、忠誠を誓うために、みずから人質を差し出す者もいたと言います。「家光がはじめた」のではありません。

参勤交代は、鎌倉時代の「御恩と奉公」がもとにあります。参勤交代の目的は、「将軍と大名の、主従関係の確認」です。将軍は御家人の土地を認めたり、土地を与えたりする（御恩）。そのかわりに御家人は、命を懸けて将軍のために戦ったり、鎌倉や京都を守ったりする（奉公）。鎌倉時代の武士は、この「ギブ アンド テイク」（もらったらお返しする）の契約で成り立っていました。江戸時代もこの原則なのです。「平時の軍役」として参勤交代を行っていたのです。江戸時代には戦争はほぼない状態です。だから武力で奉公するのではなく、江戸の将軍のもとに参上して挨拶し、さまざまな仕事を勤める。それがこの時代の奉公になりました。参勤交代によって常時半数の大名が江戸にいることになり、いざ戦争や反乱がおこれば、ただちに彼らに軍役を課して動員することも可能になりました。参勤交代は幕府が江戸にいる大名の監視をするのにも役立ったし、交通の発達や、諸大名間の文化交流も促されたのです。参勤交代を俯瞰して幕府・統制される大名や庶民にとってのそれぞれのプラス面とマイナス面を見ないといけないのです。家光の武家諸法度が、大名支配とは関係ないという訳ではありません。厳しい支配内容もあります。「参勤交代」を自分の既習知識や、教科書や朱書編の内容を鵜呑みにしてしまうと、「何をこそ、この教材で教えるべきか」がずれてしまいます。

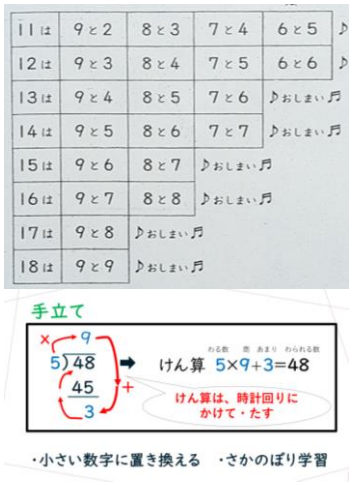
三、「つながり」を見つける事が教材研究

鎌倉時代からの「御恩と奉公」が「参勤交代」へと武士の社会の構造はつながっているのです。こうとらえることが「教材研究」の内容になります。（次回は、後の時代へのつながりについて述べます）

学力研　第十七期　先生のための学校（オンライン）六回目報告

鈴木基久

【講座A】図書啓展
「計算のつまずきを
　乗り越えるために」
　つまずきを分析して手立てを考えることが重要。４つの手立てを紹介。
① 視覚化する。
・補助数字（赤ちゃん数字）を書くことでスモールステップにする。
② リズムにのせる
・一年生　10.の合成・分解「とととロの歌」。11.～18.までの数も合成・分解



③ 置き換える
・簡単な数字に置き換えると考え方がわかりやすくなる。「検算は時計回りにかけて足す。」
④ スモールステップにする
・階段プリントで　2段目の一の位には何も書かないことをマスター。
・3桁×2桁をノートにいきなりさせない。プリントでまずやってみる。
・小数÷整数（4年）で、まず整数のわり算で計算の手順をさかのぼり。

【講座B】丸小野聡暢
「授業づくりで学級づくり
　～社会科の授業を通して～」
　授業のねらいは3つ。①単元のねらい、②子どもたちの学習能力、③子どもたちの学習規律。②は読み書き計算話す聞くの力、③は立ち歩きや私語なく授業ができるなどの集団の力で、自治の力につながっていく。
　教材研究では、学習指導要領・指導書・教科書で単元を見通す、子どもと同じノートを準備する、板書計画を用意、の3つをしている。
　現地の見学の際には、史跡や建物だけの写真でなく自分自身が入った写真を撮るようにしている。教師が現地に行った写真を見せることで、子どもの興味がぐっと高まる。
　学習能力を高めるために「書く力」を予習や復習、単元の振り返りで鍛える。予習には、授業の質を高める、一人一人の学びを確実なものにする、やる気を起こさせる、学力が低い子のエンジンを温める等の効果がある。
　学習規律、集団として学ぶ力を高める手立てとして、共同で学力づくり（テスト勉強）、司会の技で授業を子どもとつくることをしている。
　子どもの振り返りから、予習復習や問題作りの効果を子ども自身が実感している様子がよく伝わってきた。

【講座C】吉田雅直
「低学年の学級づくり
～自治的集団を目指して～」
子どもたちが「心地よさ」（快適な情動）を感じながら、きらきらと輝いているみんなが「幸せ」なクラスが理想。樺沢紫苑「３つの幸福」によると脳科学的な「幸せ」とは、ドーパミン、オキシトシン、セロトニン。学級における幸せ「快適な情動」を脳科学的に分析すると
① セロトニン的「快適な情動」
身体感覚の心地よさ
・五感への刺激（皮膚感覚）
・体を動かすこと（なわとび）
・声を出す（音読・リズム漢字）
② オキシトシン的「快適な情動」
なかまとつながる喜び
・教室に居場所がある安心感
・みんなで取り組むワクワク感
・友だちの役に立つ貢献感
つぶ書きタイム
漢字を覚えるという孤独な作業をみんなでかしこくなる豊かな時間に。
友だちの成長が自分の喜びになる。
③ ドーパミン的「快適な情動」
できる・わかる・成長する喜び
・ちょっと頑張ればできそうなこと
・最小限の努力で最大の成果を
・自分の成長を実感できる工夫を
百マス計算のポイント
・タイムを記録→成長を実感
・挑戦する気持ちでも分泌される。
・やめるタイミングも大切。
規範意識が高く、担任の影響を受けやすい低学年だからこそ、担任が変わっても力を合わせてよりよい学級を目指せる自治的な子どもたちに！

【講評と講話】　久保　齋　校長
計算は学力回復の牽引車。まずは算数の計算で自信をつけることで学力回復に向かうことができる。３学期にはどの子も下学年の計算を全部できるようにしてほしい。
教員が社会科の教科書をしっかり読んで、何を教えなければいけないのかを文章化できないといけない。
子どもたちが休み時間に社会科の話題で盛り上がれるかが重要。
快適な情動を脳科学的に深めようとしている。自治のスタートは「頼りになるのはお隣さん」。テストで比較される子どもたちだから、テストの直前まで共同でテスト勉強させる。問題を出し合うことで、学力を付けるだけでなく共同の取り組みになる。
《受講者の感想より》
・本日初めて参加させていただきました。早速連休明けからクラスでやってみたいと思える時間でした。
・苦手な子の計算力をつけていくことが、やる気につながることが分かりました。予習もやってみます。
・仕事と家庭との両立に日々追われながら、教材研究も十分にできない日々に落ち込むこともありましたが、この「先生のための学校」に参加しているということが、自信になっていました。zoomで参加できるのが、子育て世代にはありがたいです。来年も参加したいです。

局長だより　3月

◇学力研最新情報　岸本ひとみ

●いろいろチャレンジ！！

３学期は、次の年に向けて、いろいろチャレンジしてみるチャンスです。例えば、１年生でも、２年生の内容に踏み込んでみるとか、体育でちょっと難しい技に挑戦してみるとか、いろいろ考えられます。

○マス計算にチャレンジ

９月からの担任なので、計算カードの引き算がなかなか終わらず、２月末まで引きずりました。計算カードには、時間と場所を問わず練習できるという利点がありますが、カードをめくるという手作業が苦手な子どもには、不向きです。そのため、マス計算とカード検定を併用することにしました。

といっても、１０マスから始めて、５０マスまでを少しずつ増やしていく形ですから、難易度としてはたいしたことはありません。

でも、子どもたちは、

「あっ、これお姉ちゃんがやってた！！」

「ほんまや。見たことある。」

と、大騒ぎでした。高学年になった気分で楽しく取り組んでいます。

○パスワード入力を自力で

タブレット端末のパスワード入力を、自力でやってみようと考えています。子どもたちの考えだしたやり方を紹介します。キーボードのひらがなを探して、入力していくのです。大文字の場合は、お家マーク（シフトキーのこと）といっしょに、ひらがなを押すという方法です。パスワードを、ひらがなキーの文字に直すと、完全に呪文になってしまいます。「もて、たとお家マーク、な、……。」というように、覚えています。

この方法を１月に一人の子どもから聞いて、さっそく教えてみると、簡単に入力できるのです。パスワードさえ入力できれば、キーボード―とタッチペンで、簡単な検索はできるようになりました。

どちらも、ちょっと背伸び気分で、大喜びでやっています。次年度の０学期ですね。

◇事務局だより　岡本　美穂

●春の先生のための学校　申し込み開始しました

▼毎回１００名以上のお申し込みがある大人気講座です。毎日お申し込みがある状態です。

▼３月２４日（日）

すでに４０名のお申し込みいただいています。

https://www.kokuchpro.com/event/e19f99052bb0cbbe5b3c7dc61b4766ce/

▼３月３１日（日）

https://www.kokuchpro.com/event/37655a94aa317afd127a9beb e8bb3fd/

そして、今年度は、５月１８日（土）に対面講座を大阪で予定でしています。対面講座のよさ、それは

「感情が揺さぶられること」

です。講師の「非言語情報」が参加者の感情に刺激を与えることと間違いありません。またお知らせさせていただきます。

●二夜連続　一年生講座

初めて１年生の担任をされる方、久方ぶりの方に贈ります。他の学年とは一味違う１年生担任のコツをお伝えします。第１回は入学式準備と学校生活での習慣づけの指導を紹介します。

○入学式までのチェックリスト、入学式の迎え方

○入学式での１年生の保護者対応

○はじめの一週間、朝の用意、当番など

○Q&A コーナー

第１回

2024 年 3 月 27 日（水）19:30～

https://www.kokuchpro.com/event/cc15ae538157f82d920d2e978dc20414/

第２回

2024 年 3 月 28 日（木）19:30～

https://www.kokuchpro.com/event/c6c0c4e677a25ff2667af75a680cd28f/

●メルマガのご登録よろしくお願い致します。

メルマガもおかげさまで続けることができています。まだ登録していないというお方は「まぐまぐ学力研」で検索してください。おかげさまで４４６名になっています。

学力研カレンダー

≪各地のサークル・部会　２０２４年　3月　例会、イベント≫

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

3/

１５（金）春日井学力研　18 時半～　　レディヤン春日井(JR 勝川駅)　　山口 080-6904-1697
２３（土）大阪教育サークルはやし　　午後　エルおおさか　　荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp
３１（日）神奈川学力研　10 時～12 時　県民サポートセンター７０４号室 (横浜駅西口)　　湯浅 090-1104-4667

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

○　いろえんぴつ（加印）　18 時半～　稲美町ふれあい交流館　岸本 090-9117-6330
○　みなみ学力研　9 時半～12 時　阿倍野区民センター　図書 nobu580701@yahoo.co.jp
○　伊丹学力研　18 時半～　※阪急武庫之荘駅近く　前田 090-9715-3830
○　持ち方書き方研究会　ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を　前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等　今後の予定 》

○　春の先生のための学校【全３回】

3月　24日（日）　13時10分～15時　　3月31日（日）　13時10分～15時
5月18日（土）　13時10分～16時　対面講座

○　１年生講座　（新年度）

3月27日・28日（水・木）　１９時半～

（詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで）

（講師派遣希望、サークル情報などは　事務局へ　079-426-5133）

ご意見・ご感想は下記まで
荒井　賢一　E-mail　aik28501@bca.bai.ne.jp
李　詩愛　E-mail　iwamotoshie@gmail.com
堀井　克也　E-mail　katsuya4k1h9@gmail.com